

〈ガウェイン・カントリー〉の継承と発展 ——『忘れられた巨人』への着想源——

岡 本 広 毅

1. 〈ガウェイン・カントリー〉と風景

中世ロマンス *Sir Gawain and the Green Knight* (『ガウェイン卿と緑の騎士』) に描かれる独特の風景はこれまで多くの注目を集めてきた。近年日本でも公開された映画『グリーン・ナイト』(原題: *The Green Knight*, 監督: デヴィッド・ロウリー, 配給: トランスフォーマー) では荒地や岩山、洞窟や沼沢地など広大な自然風景がガウェインの孤独な旅の背景を彩った。特に、物語の大半を占める茫漠たる大地は優れた映像美とともに原作の雰囲気を再現している。『ガウェイン卿と緑の騎士』において、騎士の内面を映し出す風景の機能と文学的技巧は高く評価されてきた。池上俊一は、「自然がシンボリックな把握から解きはなたれ、自然の景観が心の琴線にふれ、また心の状態が景観に共鳴するような感受性」の萌芽として本作を挙げ、「主人公の心理や気もちのあり方を反映し、その比喩となるような風景描写がヨーロッパ史上はじめてでてくる」(172) と記している。

14 世紀末に書かれた『ガウェイン卿と緑の騎士』が一般的に膾炙したのは 19 世紀以降である。1839 年に Frederic Madden によって最初の校訂本が編まれ学術的研究が進むと、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて幾つかの現代英語訳や翻案作品が出始めた¹⁾。この流れとは別に、緑の騎士の挑戦を巡るエピソードは、Thomas Malory の *Le Morte Darthur* (『アーサー王の死』1485 年 [ウィリアム・キャクストン版]) を基調とする簡約版の物語にも現れた。マロリーの『アーサー王の死』はヴィクトリア朝の中世主義運動を牽引した作品で、本来緑の騎士の逸話とは無関係であった。しかし、それが再話の形でアーサー王物語の主流へと進出していったことは認知度の高まりを物語る。1882 年に出版された Charles Henry Hanson の *Stories of the Days of King Arthur* は、緑の騎士のエピソードがマロリーの枠組みに初めて組み込まれた例とされる。本書にはフランス人画家ギュスターヴ・ドレによる挿絵が挿入され、8 章「ガウェイン卿と緑の騎士」では騎士が緑の礼拝堂に向かう場面が描かれている(“On the Way to the Green Chapel”)。旅の後景には切り立つ山々や岩肌険しい断崖が現れ、ゴシック的な雰囲気を漂わせる。

全身緑色の騎士による首切りの挑戦というユニークな題材があるにも関わらず、緑の礼拝堂への光景が抽出されている点は興味深い。『ガウェイン卿と緑の騎士』の原拠や類話(フランスの物語やケルト神話に遡る)の解明が進む中、旅先の自然風景は本作独自の追加要素として高く評価された²⁾。地方の風景という観点でいえば、Howard Maynard は *The Arthur of the English Poets* (1907) の中で本作を取り上げ、“unusual appreciation of nature” (208) を称えている。加えて、人間の“nature”も心得ていたとし、次のように解説する。



What is more, the writer knew human nature; he knew well the rougher aristocratic life, that which was remote from the influence of London and the court. In the story of Gawain's visit at the Green Knight's castle, it is not too much to say that country-house life appears in English fiction for the first time in a way which is persuasively real. (208-209)

詩人はロンドンや宮廷から遠く離れた地方貴族の「荒々しい生活模様」を熟知していた、という。ベルティラック卿（＝緑の騎士）の治める地方空間は「カントリー・ハウス」にも見立てられ、英国フィクション史上初めて登場した例に挙げられている。19世紀から20世紀にかけて、のどかな田園の生活（理想郷としての「アルカディア」）に立ち戻ろうとする動きが生まれ、その実態はともあれ、カントリー・ハウスを中心とする景観は重要性を帯びていた³⁾。中世ロマンスの地方描写は当時の社会的関心と紐づけられるほど興味をそそる対象となっていたことが窺える。

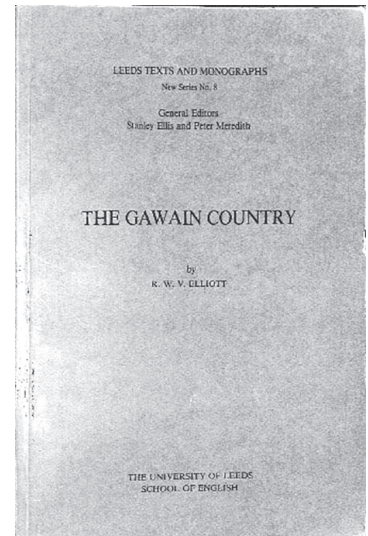
地方へ好奇な眼差しが向けられる中、1955年 Derek Pearsall は“Rhetorical ‘Descriptio’ in *Sir Gawain and the Green Knight*”と題した論文を発表し、本ロマンスにおける古典文学以来の修辭的技法の影響とその敷衍について検証した。中世の自然描写は現実の風景を反映したものではなく、たとえば13世紀の寓意詩『薔薇物語』や14世紀の英詩『カンタベリー物語』冒頭の春の描写にみられるように、中世の修辭的伝統に倣った一種の定型的・詩的風景であった。特に自然叙述を巡っては、植物や動物などを書き連ねる規範的手法が確立されていた。『ガウェイン卿と緑の騎士』ではこの幾分メカニカルな羅列は顕著ではなく、物語の主題や登場人物の状況・行動に応じた“rhetorical amplification” (132)「修辭的敷衍」がたしかに認められる⁴⁾。ただし、それは荒野や自然美を尊ぶ詩人のロマン主義的精神に動機づけられたものでもなければ、実際の観察に基づく描写でもない。あくまでも“The description is functional in the strict rhetorical sense” (132)、すなわち修辭的機能を厳格に踏襲した結果に他ならないのである。

一方で1958年、R. W. V. Elliott は *The Times* に“A Detective Essay in Literary Geography”と題する小論を寄稿し、『ガウェイン卿と緑の騎士』における自然風景がイングランド北西部の現実に即した描写であると主張した。これを皮切りに、一連の研究は1984年に *The Gawain Country: Essays on the Topography of Middle English Alliterative Poetry* として上梓された。エリオットは詩人にとって修辭伝統が“not a strait jacket but … a tool handled with innovative sensibility” (9) である可能性を追究したのである。特に作品を彩る地理・地形上の語彙——平野、森、丘、岩山、谷、小川、沼地など——を緻密に分析し、地域に根差した詩人のローカリズムを読み取った。緑の礼拝堂を探し求めガウェインが辿った経路も想定され、地方の滞在先はチェッシャー、スタッフォードシャー、ダービーシャーの境界付近の一带とされる。実際に本詩の言語はこれらの地域の方言が用いられているばかりか、詩人の使用する特殊な地形関連の語彙が今も地名として残っているのである（例えば Knar, Knotbury, Flash など）。緑の騎士との約束の地である緑の礼拝堂は“Ludchurch”あるいは“Lud's Church”と呼ばれる大地の裂け目（スタッフォードシャーとチェッシャーの境界を流れる The River Dane 付近の丘の斜面にある）と同定されている（これらの地名に関してはエリオット作成の地図を参照）⁵⁾。これらから成る地方一帯は“The Gawain Country”〈ガウェイン・カントリー〉と名付けられるに至った⁶⁾。地域色に富む自然描写は古典文学の伝統・装飾に収まり切らない、現地に今も残る真の風景なのである。実地踏査とフィロロジカルな知見に裏打ちされたエリオットの研究は、ともすれば修辭性や

寓意性が優先される研究動向やそこから生じる画一的な中世認識に対して一石を投じたといえよう。また、ジェフリー・チョーサーを中心とする南部の宮廷文学だけでなく、北西部の風土に根差した地方文学の価値を再評価する契機にもなったに違いない。

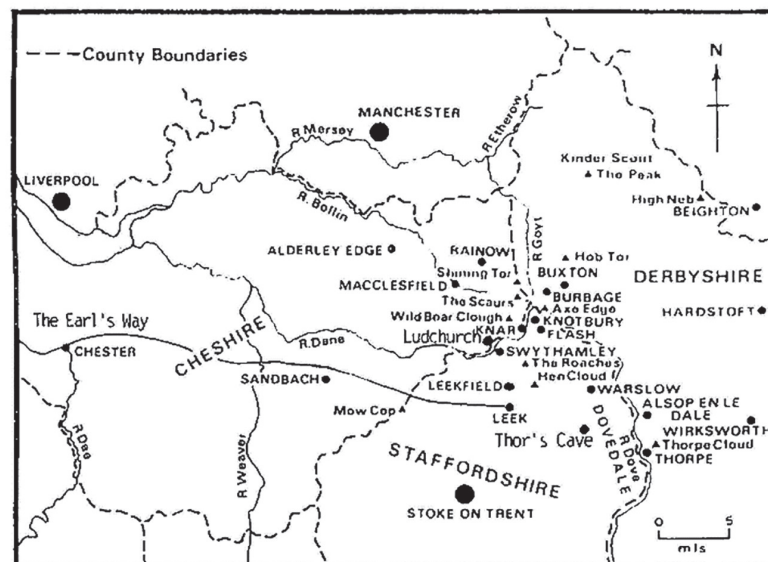
このように、『ガウェイン卿と緑の騎士』の自然風景は主に文学伝統に連なる定型的な表現か、地方の現実在即した表現かという立場から論じられてきた。ただ、一見相反するこうした活発な議論が本作の風景への理解を深め、さらなる研究や創作の種を育んだともいえよう。本論ではまず〈ガウェイン・カントリー〉の描かれ方を再検討した上で、地方の一風景がいかに受容されたかをみていきたい⁷⁾。後者の一例として、ノーベル賞作家 Kazuo Ishiguro の *The Buried Giant* (『忘れられた巨人』2016) を取り上げ、中世ロマンスの風景

解釈の継承と文学的発展の一端を探る。『忘れられた巨人』はアーサー王物語を題材とし、中でも『ガウェイン卿と緑の騎士』で描かれる風景の一節が重要なインスピレーションとなった、とイシグロは明言している。同作家の *The Remains of the Day* (『日の名残り』1989) の風景の役割を踏まえると、『ガウェイン卿と緑の騎士』が『忘れられた巨人』に及ぼした影響は単なる気まぐれや偶然ではなく、必然的選択であったと考えられる。中世の地方詩人が描く斬新な風景世界はイシグロ文学で追及される主題——歴史と記憶——を掘り下げる創造的素地となったのである。



110

RALPH ELLIOTT



The Heart of the Gawain Country (shows area near Leek)

出典：Ralph W. V. Elliott, "Landscape and Geography." *A Companion to the Gawain-poet*, edited by Derek Brewer and Jonathan Gibson (D. S. Brewer, 1997), p.110.

2. 荒野に行く“naked”な騎士

まず、『ガウエイン卿と緑の騎士』の風景の描かれ方とその役割について検討する。本作はアーサー王物語群に属し、「ロマンス」というジャンルに分類される。中英語辞典 (*Middle English Dictionary*) によると、ロマンスの第一義 (s. v. “romance” 1) “(a) A written narrative of the adventures of a knight, nobleman, king, or an important ecclesiastic, a chivalric romance”であり、騎士や高貴な人々の冒険を軸とする。ここから派生し、“a tale of fictional or nugatory content as opposed to a factual account” (“~ of scoff” とのコロケーションにおいて) という語義もある。この場合、事実に反する「虚構」(侮蔑的ニュアンスを含む) を意味する。J. Finlayson が “Romance geography is notoriously unrealistic” (“The Expectations of Romance” 11) と評するように、虚構的・魔法的空間の広がるロマンス・騎士道物語では実在の地理や土地柄が具体的に描かれることは珍しい。エーリヒ・アウエルバッハの言葉を借りるなら、「騎士道物語は詩的に構成された現実ではなく、童話への逃避」(242) というわけである。

『ガウエイン卿と緑の騎士』はロマンスの定石にとらわれない作品である。緑の騎士の挑戦から一年後、ガウエインは王都キャメロットから一路北へ出立する。宮廷や仲間を後にし、一路礼拝堂を目指す騎士の旅路は次のように記される。

Now ridez þis renk þurȝ þe ryalme of Logres,
 Sir Gauan, on Godez halue, þaȝ hym no gomen þoȝt.

 Til þat he neȝed ful neghe into þe Norþe Walez.
 Alle þe iles of Anglesay on lyft half he haldez,
 And farez ouer þe fordez by þe forlondez,
 Ouer at þe Holy Hede, til he hade eft bonk
 In þe wyldrenesse of Wyrle; wonde þer bot lyte
 Þat auþer God oper gome wyth goud hert louied. (ll. 691-702, 太字筆者)⁸⁾

この一節には魔法的空間とは到底形容しがたい地名や地理的言及がみられる。ガウエインの本拠地(王都キャメロット)である“ryalme of Logres”「ログレス王国」(後の「イングランド」を指す)はアーサー王ロマンスの慣例的な場である。これとは対照的に冒険先の地域は具体的だ。“þe Norþe Walez”「北ウェールズ」をはじめ、“þe iles of Anglesay”「アングルシー島」、 “þe Holy Hede”「ホーリーヘッド」、 “þe wyldrenesse of Wyrle”「ウィラルの荒れ地」など、まるで騎士の足跡をたどれるかのように、ウェールズからイングランド北西部への道程が示されている。しかも中心部ではなく周縁部に特化した言及といえよう。周辺地理に精通していなければこれほどまとまった形で列挙することは難しいのではないか。定冠詞“the”(「北ウェールズ」という地名に用いるのは異例)の使用からも、地方一帯に対する詩人の馴染み深さが窺える (Tolkien & Gordon 97)。

さらに、本作の地形や土地柄も特徴的である。緑の騎士との約束の地である「緑の礼拝堂」が

“Hautdesert” (l. 2445) と表されるように、荒涼たる大地が地方一帯の大半を占める。荒野はロマンスに頻繁にみられるが、本作の殺伐たる風景は岩石や岩山に関する特殊な語彙の使用によって一層印象づけられている。中世ウェールズ語起源の “crag” 「岩」は詩人が好んで用いる語で、地方領主ベルティラックの狩猟の舞台 (l. 1430) や緑の騎士の棲み処 (l. 2183, l. 2221) にもみられる⁹⁾。同様に旅の道中、ガウェインを襲う巨人たちの棲み処は “knarre” と表現され、これも「岩場」を意味する¹⁰⁾。ベルティラックによる猪の狩り (l. 1434) や緑の礼拝堂への道中にも用いられ、地域の地形を万遍なく特徴づけている。後者の場面で描き出される光景は地方の自然風景の極致といえよう。

And þenne he wayted hym aboute, and wylde hit hym þoȝt,
 And seȝe no syngne of resette bisydez nowhere,
 Bot hyȝe bonkkez and brent vpon boȝe halue,
 And ruȝe knokled knarrez with knorned stonez;
 Þe skwez of þe scowtes skayned hym þoȝt. (ll. 2163-67, 太字筆者)

(さて、ガウェインは周りを見回してはみたものの、四方は一面
 荒涼たる^{あれの}曠野で、何処にも隠れ家らしきものは何一つ見あたらず、
 ただ両側に高く切り立つ山の斜面と角^{かど}ばったる
 岩だらけの絶壁がはるかに広がるばかり。
 そのそそり立つ岩壁は今にも雲に触れんばかりに高く^{そび}聳える。) ¹¹⁾

ガウェインの眼前に広がる殺風景な土地。そそり立つ崖と険しい斜面、辺り一面を覆う “ruȝe knokled knarrez with knorned stonez” 「ごつごつと荒く突き出た岩々」があるばかりで、雨露を凌ぐ場所もない。岩々は “scowtes” 「岩山」という本作特有の古ノルド語起源の語で言い換えられている。詩人は馴染みのある風景を描く際に、他の作品ではあまりみられない語を使用する傾向にある、という (Elliott, *The Gawain Country*, 76) ¹²⁾。この特殊性は辺境を彷徨うガウェインにも印象的に映る。詩人は「岩山が雲を掠めているように思われた (“hym þoȝt”)」と表現し、騎士の考えに触れている。緑の騎士との再会 (= 死の一撃) を前に、僻地の荒々しい景観は大団円に向け緊迫感を一層高めているといえよう。

さらに、荒野をゆくガウェインは厳しい荒天候に苛まれる。従来のロマンスでは悪党の騎士やモンスターが立ちはだかるが、本作では過酷な冬の大地こそが騎士の大敵となっている。池上忠弘は「Gawain-poet が冬に描写をこれ程普通の rhetorical な用法をぬきんでて大規模に、単なる背景設置以上に作品全体をおおう重要な役割をあてたことは、England の北国に住むこの詩人独特の文学的感性を示すもの」(14) と推察する。また、菊池清明は古英詩や抒情詩の自然描写を検討した上で、本作の「圧倒的な冬の描写は、中世英文学のあらゆるジャンルの作品の冒頭を彩ることになる「春」の描写に、あたかも対峙するかのような姿勢であり、他の中世英文学作品には見られない新しい要素」(279) とまで論及している。北国特有の冬景色の中で、南方から来たガウェインは予想外の窮地に陥る。

For werre wrathed hym not so much þat wynter nas wors,
 When þe colde cler water fro þe cloudez schadde,
 And fres er hit falle myȝt to þe fale erþe;
 Ner slayn wyth þe slete he sleped in his yrnas
 Mo nyȝtez þen innoghe in **naked rokkez**,
 Þer as claterande fro þe cress þe colde borne rennez,
 And **henged heȝe ouer his hede** in hard iisse-ikkles. (ll. 726-32 太字筆者)

(確かに、^{いくさ}戦は彼をさほどに打ちのめすことはなかりしも、冬こそさらに過酷で、
 雲から冷たき澄みきる雨が降り注ぎ、^{いろあ}色褪せぬる大地にとどく前に凍るほどであった。
^{みぞれ}霰の寒さに、冷えきり危うく命を落としそうになりながら、
 ガウェインは^{かつちゅう}甲冑をよろいたるまま地に^{あらわ}露したる岩間に^ふ臥して、
^{いくたび}幾度の夜を過ごせしことか。
 そこにては、山の^{いただき}頂から湧き下る冷たき^{こながれ}小流がしぶきをあげて流れ、
^{つらら}固き氷柱となって、彼の頭上高く垂れ下がっていた。)

“Werre”「戦」よりも“wynter”「冬」のほうが“wors”「より深刻な脅威」である。ガウェインは冷たい雨に打たれ、氷柱によって絶命の危機を迎える。それらは上空より“falle”落下するもので、氷柱にいたっては“henged heȝe ouer his hede”とあり、騎士の頭上で不気味に待機しているのだ。苛酷な冬的一幕はキャメロットで受けた緑の騎士からの一撃の悪夢、そして来るべき断頭をも連想させる。

困難の中、騎士が唯一身を寄せ寝床とするのが“naked rokkez”「剥き出しの岩々」である。岩を形容する“naked”は地方の地形上の特徴のみならず孤独な騎士の状況を暗に示している¹³⁾。ここで本作中の“naked”の使用例とその指示内容（トルキン・ゴードン版の語釈に基づく）を確認する。

用例・指示物	Tolkien & Gordon 版の語義
Let the naked nec to to þe neote schewe (420) ➡ 緑の騎士の首	“naked, bare”
Let hit doun lyȝt on þe naked (423) ➡ 緑の騎士の首	“bare flesh” (as sb.)
Mo nyȝtez þen innoghe in naked rokkez (730) ➡ 剥き出しの岩々	“naked, bare”
þe tweyne yȝen and þe nase, þe naked lyppez (962) ➡ モルガンの唇	“naked, bare”
Hir þryuen face and hir þrote þrowen al naked (1740) ➡ 奥方の顔と喉元	“naked, bare”
Wyth nyȝe innoghe of þe norþe, þe naked to tene (2002) ➡ 粗末な服を着た人々	“the ill-clad” (as sb.)
þe nirt in þe nek he naked hem schewed (2498) ➡ ガウェインの首	“naked, bare”

自然地帯を修飾する形容詞“naked”は先に見た場面でのみ使われていることがわかる。ただ、このように見ると、本作は緑の騎士の“naked”な首の露出に始まり、ガウェインの“naked”な首に受けた傷跡の告白に終わると言ってもいいだろう。この点に関連して、Richard Godden は“naked”が

「ガウェインの喉」や「奥方の唇」などに用いられ、詩全体を通して多くの悲劇的要素と絡み合い、“In this one word, we can find the essence of the Arthurian story, at least of its ending”とまで考究している¹⁴⁾。たしかに“naked”は物語を突き動かす鍵となる語であり示唆に富んでいる。それは旅先の僻地で心身ともに“naked”な状況へと晒されていく過程、高潔な騎士が一人の“naked”な生身の人間へと転落する過程を暗に伝えるのである。

ベルティラックの居城に到着したガウェインは、歓待を受け“*Per he watz dispoyled, wyth spechez of myrþe, / þe burn of his bruny and of his bryȝt wedez*” (ll. 860-61)「彼は楽しげに話しながら、鎖^{くさり} 鎧^{よろい}や華やかなる衣裳^{よそおい}や／物の具を解いてもらう」ことになる。“despoil”は単に身に着けているものを剥ぐという行為にとどまらず、Arthur Lindleyが述べるように騎士のアイデンティティ喪失を意味する象徴的前触れとなる(77)。宮廷に迎え入れられ真っ先に“despoil”されるガウェインの身体は、「剥き出しの岩々」に表象される外界の風景へと接近し、無防備かつ無力な騎士の状況を引き立たせよう。何より、ガウェインの目的は緑の騎士に〈生身の首〉を差し出すことである。この結末を占う上で、フィット4の冒頭で語られる冬の景色は注目に値する。緑の騎士と交わした約束の当日、厳冬に見舞われる北の大地の様子がここで再び喚起される。

Bot wylde wederez of þe worlde wakned þeroute,
Clowdes kesten kenly þe colde to þe erþe,
Wyth nyȝe innoghe of þe norþe, þe naked to tene;
þe snawe snitered ful snart, þat snapped þe wylde; (ll. 2000-03)

(されど、城の外では、激しき冬の嵐^た起ちて吹きすさび、
雲は、身を切るとき酷寒^{こっかん}の朔風^{さくふう}でかの寒気を地上に吹き降ろし、
粗末^{ころも}なる衣^いを身にまとう者を責め苛^{さい}むのだ。
雪は風^{あお}に煽られて、激しく降り注ぎ、野の獣^{けもの}たちを凍えさせて苦しめる。)

身をきるような冷たい北風が人肌を悩ませる、という外界の様子である。トールキンとゴードンはこの“the naked”を集合名詞としてとり、“the ill-clad”「粗末な服を着ている人々」としている。一方、“the naked”は屋内で眠るガウェイン自身の姿と密かに重なり合う。その言外には、度重なる奥方の誘惑によって文字通り「丸裸にされた」ガウェインの現状が透けて見え、さらにはこの後緑の騎士に否応なしに差し出すこととなる“naked”な首が含意されているのではないか。事実、当日の気象と土地の関係性は、緑の礼拝堂において一撃を与える緑の騎士とそれを甘受するガウェインという構図と奇妙に折り重なる。

He lyftes lyȝtly his lome, and let hit down fayre
With þe barbe of þe bitte bi þe bare nek;
þaȝ he homered heterly, hurt hym no more
Bot **snȳrt** hym on þat on syde, þat seuered þe hyde. (ll. 2309-12, 太字筆者)

(かの男、斧を素早く振りかざすと、露わなる首を目がけて
 たちどころに斧の切っ先を打ち下ろす。
 勢いよく打ちつけたにもかかわらず、首の片側を軽くかすめて
 皮膚にはほんの切り傷を残したにすぎなかった。)

斧が打ち降ろされる際に使用される“snirten” (“snyrt”は過去形)はフィット4の冒頭にあった“snitered ful snart, þat snayped þe wylde”(「凍てつく雪が大地に舞い降り、荒れ地をひどく凍えさせた」)という一節を想起させる。“sniteren / snart / snaypen”はいずれも古ノルド語由来の言葉で、中英語作品における使用分布は非常に限定されている。結果、ガウェインが被った“nirt”「かすり傷」にいたっては本作以外に使用例の見られない“hapax legomenon”である¹⁵⁾。緑の騎士の一撃“snirten”が“nirt”へ結実する様子は、緑の礼拝堂を目前に現出する先に見た光景——“þe skwez of þe scowtes skayned”「岩山が雲を掠める」——とも近似していよう。

以上、一連の特徴的かつ複合的な表現の連なりに着目すると、緑の騎士の一撃には「ガウェイン・カントリー」特有の情景が憑依しているかのようである。天候の“sniteren”、騎士の一撃による“snirten”、結果被った傷“nirt”など、特殊な表現が重なり反響することで、地方での経験がガウェインの“naked”な身体および内面に深く刻み込まれるのだ。「剥き出しの岩々」に象徴される寂寥たる風景はただ字義通りに存在するのではなく、過酷な試練を前にした騎士の精神状況や物語の展開に影を落とす地方的演出なのである。

3. 地方風景の継承——『忘れられた巨人』への着想源

カズオ・イシグロの『忘れられた巨人』はアーサー王亡き5、6世紀頃のブリテン島を舞台とする。主人公は西部に住むブリトン人老夫婦のアクセルとベアトリスで、ある日彼らは息子の住む村へ行くことを決意する。旅の途次、サクソン人戦士ウィスタンと少年エドウィン、さらには先代の王に仕えた生き残りの老騎士ガウェインが加わることで、一国に潜む歴史の渦中へ段々と引き込まれてゆく。島内に共生するブリトン人とサクソン人の友好は偽りのもので、実は「クエリグ」と呼ばれる雌竜の吐く息によって忘却させられていた。「虐殺と魔術」(“slaughter and a magician’s trickery” [311-312])の上に築かれた両民族の平和に亀裂が生じ、今や「埋められた巨人」は動き出そうとしている(ウィスタンの発言——“The giant, once well buried, now stirs” [324])——ブリトン人夫婦の息子探訪が一国の闇を秘めた竜退治へと流れ行くことで、個人と集団の記憶や忘却の適否、歴史認識のあり方をも問うに至る¹⁶⁾。

表題“The Buried Giant”(「埋められた巨人」)とは何らかの理由により抑圧・封印された忌まわしき歴史的記憶のメタファー、今日も続く国家間の争いや民族紛争の火種である。とすれば、特定の時代や地域、歴史的状況によって解釈を限定されることはない。この点で中世アーサー王物語が本作の題材に選ばれたことは実に興味深い。しかも舞台設定を巡って、イシグロは『ガウェイン卿と緑の騎士』が創作のインスピレーションとなったことを明言しているのだ。Guernica Magazineのインタビューでは、“Most of the poem—which I’ve known for a long, long time—was completely irrelevant to my book”と答え、その影響があくまでもきっかけであることを断っている。ただ、作

家が *SGGK* を長らく愛読する (“for a long, long time”) 理由は、この物語に限りなく共鳴する部分があるからだと考えられる。創作への具体的な影響については以下のように続く。

What really sparked my imagination . . . was that tiny little description of the country he [Gawain] was crossing. It sounds like such a weird place. Britain in those days was really rough. There weren't any inns or anything like that where he could stay, so he had to sleep on rocks in the pouring rain—I don't know why he had to sleep on rocks, he could have slept under a tree, but that's what it says—and there are a couple of lines that say that he was chased by wolves and wild boar and panting ogres. They'd chase him up hills, out of villages. That's the first and last time you hear anything about ogres. I thought, “This is a rather interesting landscape.”¹⁷⁾

「とりわけ想像力を掻き立てられた」箇所は「ごく数行で記された地方の素描」で、先にみてきた風景の一節である。当時の “really rough” 「実に荒んだ」ブリテンは一風変わった場所で、降り頻る雨の中、岩場を寝床とする他なかったガウェインの姿は強く印象に残ったようだ。また、獣や鬼に追い回される模様も含めて「興味深い風景」と記している。『忘れられた巨人』の冒頭にはたしかに『ガウェイン卿と緑の騎士』に似た風景が浮かび上がる。

You would have searched a long time for the sort of winding lane or tranquil meadow for which England later became celebrated. There were instead miles of desolate, uncultivated land; here and there rough-hewn paths over craggy hills or bleak moorland. Most of the roads left by the Romans would by then have become broken or overgrown, often fading into the wilderness. (1)

イングランドの現代と過去の風景が読者 “You” に向けて対比されている。舞台は「のどかな草地とその中をのんびりとうねっていく小道」ではなく、「荒涼とした未墾の土地」、「岩だらけの丘」、「道らしきものもない荒野」である。“craggy hills or bleak moorland” は中世原典の「ガウェイン・カントリー」的特性を髣髴させよう。さらに以下のように続く。

Icy fogs hung over rivers and marshes, serving all too well the ogres that were then still native to this land. The people who lived nearby—one wonders what desperation led them to settle in such gloomy spots—might well have feared these creatures, whose panting breaths could be heard long before their deformed figures emerged from the mist. But such monsters were not cause for astonishment. People then would have regarded them as everyday hazards, and in those days there was so much else to worry about. (1)

ローマ人が残した自然地帯には悪鬼が “native” として出没し、川や沼地に立ち込める冷たい濃霧は彼らにとって格好の棲処となっている¹⁸⁾。ただ、モンスターの出現は日常茶飯事ゆえ大した事象ではなく、むしろ食料の確保や疫病対策といった生活上の問題が急務だった。こうした状況は北国の気候に苛まれる『ガウェイン卿と緑の騎士』の一節 (II. 726-32) を想起させよう。『忘れられた巨

人』の舞台とは現実と超自然性が織り成す中英語ロマンスの世界であり、地方の日常と地続きにある「ガウェイン・カントリー」の一風景であることわかる。

ところで、ファンタジー作家で批評家の Lev Grossman は、『忘れられた巨人』の冒頭の風景描写を “This is a disenchanted landscape, not so much Arthurian as post-Arthurian: we are far from Camelot here” と表現した。先に見たような荒涼たる土地はこの評者にとって “a disenchanted landscape” 「脱魔法化した風景」であり、「キャメロットとは程遠い、ポスト・アーサー王の世界」である。つまり、「脱魔法化した風景」はアーサー王物語の王道的イメージ（ファンタジー的世界）と釣り合わないことを含意している¹⁹⁾。しかしこれまで確認したように、本風景の着想源は『ガウェイン卿と緑の騎士』で、中世アーサー王物語を代表する紛うことなき作品である。グロスマンの評言は現実とファンタジーが渾然となった本ロマンスの特異な世界観、そして「ガウェイン・カントリー」の一節が「脱魔法化した風景」を創り出す上で十分な素地を備えていたことを図らずも物語っている。

そもそも土地や風景はイシグロの主要な関心事である「記憶」と深く結びついている。Graham Swift との対談の中で、イシグロは過去と向き合う際の記憶のあり方を “memory is this terribly treacherous terrain, the very ambiguities of memory go to feed self-deception” (39) と述べており、自己欺瞞を煽る記憶の曖昧さを “this terribly treacherous terrain” という地形上の比喩でもって説明している。異民族間の衝突を巡る『忘れられた巨人』には、文字通り “treacherous” な歴史的記憶が古代ブリテンの “terrain” に漂っている。背信と争いの過去は茫漠たる大地（＝脱魔法化した風景）に刻印され、平和に眠る暗い記憶がその風景となって漏出していると言えないだろうか²⁰⁾。

『忘れられた巨人』の風景の役割は、イシグロの初期の作品 *The Remains of the Day* (『日の名残り』) のそれとの比較を通してより深く理解することができる。『日の名残り』はダーリントン・ホールと呼ばれる屋敷に仕える老執事スティーヴンスが語る回想物語である。束の間の休暇を与えられた彼はイングランド南西部へと自動車の旅に出かけ、道中のどかな田園風景を眺める。この風景は『忘れられた巨人』の冒頭で触れられるイングランドの “tranquil meadow” 「のどかな牧草地」と同質のものである。丘の中腹に立ち寄ったスティーヴンスは眼下に広がる自国の一風景 (“marvelous view . . . of the rolling English countryside” [28]) に感銘を受け、これこそ “Great Britain” にふさわしい景色であると賞賛する²¹⁾。彼はやや高慢な呼称の “Great Britain” もその景観ゆえに正当化されるとし、“greatness” の要件について以下のように分析する。

And yet what precisely is this ‘greatness’? Just where, or in what, does it lie? I am quite aware it would take a far wiser head than mine to answer such a question, but if I were forced to hazard a guess, I would say that it is the very *lack* of obvious drama or spectacle that sets the beauty of our land apart. What is pertinent is the calmness of that beauty, its sense of restraint. It is as though the land knows of its own beauty, of its own greatness, and feels no need to shout it. (29)

「我らの土地」に広がる「明白なドラマ性あるいは劇的要素のない」風景——これこそが “Great Britain” を “great” たらしめる所以である。ここでスティーヴンスは慎ましき、落着き、品位といった執事に必要な資質を四方に広がる風景美 (“the calmness of that beauty, its sense of restraint”) に重ね合

わせている。彼の風景観——“the calmness of that beauty”「美しさのもつ落ち着き」は自身の職業的信念でもある。執事の取り組みに関して世代間の違いを述べる際に、自分たちの世代の特色を以下のように言い表す。

It is my impression that our generation was the first to recognize something which had passed the notice of all earlier generations: namely that the great decisions of the world are not, in fact, arrived at simply in the public chambers, or else during a handful of days given over to an international conference under the full gaze of the public and the press. Rather, debates are conducted, and crucial decisions arrived at, in the privacy and calm of the great houses of this country. What occurs under the public gaze with so much pomp and ceremony is often the conclusion, or mere ratification, of what has taken place over weeks or months within the walls of such houses. (121-22)

世界の重大な事柄は公の会議室よりも、むしろ屋敷の密室の“calm”「静けさ」において決定されるという。この発言には、ダーリントン卿を陰で支えるスティーヴンスの強い自負が窺えよう。自分の努力と貢献に満足を覚えるとき、それはイングランドの風景が表すような、決して主張せず尊大にならない冷静な佇まいを自らが体現した、と考えているからである。

風景と人物像の関わりで見逃してはならないのは、スティーヴンスが賛美する風景の特質——「明白なドラマ性や劇的要素の欠如」が実は反対にそれらの存在が明かされるための伏線となることである²²⁾。先の言葉の中に“beauty”という語が三度も用いられているように、丘からの眺めは現実を映し出す以上に、スティーヴンス自身の理想・美意識が投影されたものだ。穏やかな風景は以後の回想内容に含まれる「ドラマ性や劇的要素」を際立たせる一種の仕掛けにもなっている²³⁾。実際にスティーヴンスの追憶の旅ではこの風景美に反するような「劇的」と言わざるを得ない記憶が徐々に回帰される。例えば、父との離別、ナチスドイツへの幫助と主人の名誉失墜、執事としての尊厳(“dignity”)の否定、そして女中頭ミス・ケントンとの悲恋などが挙げられる²⁴⁾。この点に関連して、Salman Rushdie は“Just below the understatement of the novel's surface is a turbulence as immense as it is slow”といみじくも述べ、水面下にある“turbulence”「激流」に触れている²⁵⁾。風景のごとく緩やかに進む物語の底流には、国家と個人の双方にかかわる急激な変動・動揺が渦巻いているのだ。

『日の名残り』に描かれる光景はあくまでも「信頼できない語り手」スティーヴンスのフィルター通した風景であることは留意すべきであろう。これに関連して興味深いのは、旅の三日目の道中、まず間違いなく通過したはずのデヴォン州南部に広がるダートムーア(Dartmoor)への言及がないことである。安藤聡はその理由の一つとして、「この風景が持っていた「神話的イングランド」の枠組みからはみ出していたため、彼の中でこの風景が意味するものを未だ整理できていない」(178)と述べ、ダートムーアの「劇的な」景觀がスティーヴンスの美的範疇から外れていた可能性に触れている(176-78)。実在する地名と架空の村町が混在する中、スティーヴンスは視界に入る景色を取捨選択し、見て見ぬふりをしているのではないか。ただ、ダートムーアの西端に位置するタビストックの町に到着した際、それまでとは異なる風景が描かれる。予定していた宿泊が叶わずドライブを続けるスティーヴンスの前に、次のような光景が立ち現れる。

I found myself out on a long road curving across bleak, open moorland. On either side of me were what appeared to be fields of marsh, and a mist was rolling across my path. (169)

「荒涼とした湿地帯」に差し掛かると道路の両側に沼地が見え、霧がかかると旅に暗雲が立ち込める。その後急な上り坂を迎えスティーヴンスは動揺を隠せない(“steep / steeply”という語が数回付される)。ついには現在の雇い主ファラディから拝借したフォードは燃料切れとなる。荒涼たる地と急勾配の道路の出現はともに不穏かつ劇的な旅の行く末の兆しとなる。

「クエリグの息」の効用はないにしろ、この執事の旅に立ち込める「霧の大地」は、『忘れられた巨人』における中世ブリテンの風景と類似していよう。いうなれば、平穏な田園風景を愛すスティーヴンスの嗜好に合わない景色が『忘れられた巨人』の主要舞台として継承されているのである²⁶⁾。「のどかな田園」から「荒涼たる土地」へ——この焦点の移行に一役を買ったのが『ガウェイン卿と緑の騎士』の地方風景であり、ガウェインの存在であろう。「剥き出しの岩々」を枕としたあの遍歴の騎士は本作に蘇り、風景の意味を読み解くのである²⁷⁾。スティーヴンスとの類似からしても、ガウェインによる風景の解説は決して偶然ではない。今は亡き叔父アーサーの意思を受け継ぐガウェインはダーリントン卿に仕えるスティーヴンスの姿を髣髴とさせ、両者は主人への献身を貫き、己の立場や過去の栄光に囚われている²⁸⁾。老執事の欺瞞が徐々に露呈するのに対して、老騎士は偉業の功罪により自覚的で、罪の意識と自己正当化が半ば強迫観念のように去来している。こうした点でガウェインの見る景色はたとえスティーヴンスと同じであっても認識上異なっている。ブリトン人老夫婦一行が修道院に辿り着く前、ウィスタンがサクソン人戦士を殺めた場面で、ガウェインは目の前の光景を、“It’s a great sadness this tranquil spot, surely a gift from God to all weary travelers, is now polluted by blood (135)”と嘆く。この“tranquil spot”「静かな場所」は今日のイングランドの風景である“tranquil meadow”「のどかな草地」を連想させ、かつこれはスティーヴンスが思い描く田園風景のエッセンスでもあるだろう。ただこの場面はそのような「静かな場所」が実際に血に染まる。これは戦争と平和を繰り返すブリテン史の縮図である。その後も、同様の思考に基づく風景認識がガウェインの発言に散見される。修道院の地下通路を通り抜ける際、無数の遺骨が散在する地面を見てアクセルとベアトリスに次のように言う。

‘We need not quarrel, Master Axl. Here are the skulls of men, I won’t deny it. There an arm, there a leg, but just bones now. An old burial ground. And so it may be. I dare say, sir, our whole country is this way. **A fine green valley. A pleasant copse in the springtime. Dig its soil, and not far beneath the daisies and buttercups come the dead.** And I don’t talk, sir, only of those who received Christian burial. Beneath our soil lie **the remains of old slaughter.** (186, 太字筆者)

「美しい緑の谷、爽やかな春の木立」あるいは「雛菊や金鳳花の咲く大地」——それらに彩られた地面を「掘ってみよ」とガウェインは言う。そうすれば別の実体——“the remains of old slaughter”「昔の殺戮の名残り」が眠っていると。国土を彩る緑の草原は偽りの平和に過ぎず、地下の霊廟は血塗られた国土全体を凝縮した空間なのだ。また、「ガウェイン第二の追憶」と題される章では、同士アクセルとの過去を回想する老騎士が、“Age cloaks us both, as the grass and weeds cloak the

fields where we once fought and slaughtered” (300) と語り、二人を覆う歳月の長さを「戦と虐殺の行われた場所を覆う草」の様子に見立て説明する。最終的に、雌竜クエリグを巡りウィスタンと決闘する最後の場面では、ブリトン人の過ちへの代償を求めるウィスタンに対して、“Yet it’s long past and the bones lie sheltered beneath a pleasant green carpet” (327) と諭し、ここでは「快い緑の絨毯」を「太古の骨」(=戦の痕跡)を覆う隠れ蓑として表現している。

〈緑に覆われた表層〉と〈血塗られた深層〉——ガウェインの認識から想起されるのは、作品冒頭で対比される〈現代〉と〈過去〉の風景像である。現代の人々が思い浮かべるのどかな田園風景——物語はその内実を掘り下げ、表面下に眠る暗部へと踏み込んでゆく。この構図からすれば、中世の荒涼たる大地こそが争いの記憶そのものであり、血塗られた歴史の轍である。本作の「ドラマ性や劇的要素」はクエリグの息により一時的に封印されてはいるものの、その陰惨な戦の記憶は荒廃した風景となって漏出し、暗澹たる物語の終幕とブリテンの殺伐たる未来を占う。歴史が物語るように、島の大部分を占拠し今日のイングランドを樹立するのはサクソン人側である。サクソン人の少年エドウィンの成長はブリテン島の命運を握っていると言っても過言ではない。ウィスタンはこの若き継承者の類まれな資質を認めるも“…just now you’re rough-hewn, not yet a blade” (237) と評す。“rough-hewn”「粗削り」でまだ“blade”「刃」(剣を指し示す提喻)となりえていないのである。ただ、少年の“rough-hewn”(この語彙自体作中に二度のみ)な様は、作品冒頭でも言及されているようにその足元に広がる“rough-hewn”な風景(“here and there rough-hewn paths over craggy hills or bleak moorland”)そのものだ。“rough-hewn”の“hew”はゲルマン語起源の言葉で、元々“To strike, or deal blows, with a cutting weapon” (OED, 1a) を意味し、争いや戦の爪跡と深いかかわりをもつ。作品冒頭にある“rough-hewn paths”とは少年エドウィンの行く末(path)、すなわち“blade”の飛び交う戦乱の世と表裏一体といえよう。『忘れられた巨人』の荒漠たる舞台は、憎しみと暴力の世界＝「埋められた巨人が動き出す」歴史の心象風景なのである。

以上、『日の名残り』(“The Remains of the Day”)に漂う大英帝国の残光は、『忘れられた巨人』においてより具体性を帯びた“the remains of old slaughter”「昔の殺戮の名残り」へとスライドし、栄華の陰に埋もれた一国のもう一つの本質が浮き上がる。中世ロマンス世界より再来したガウェインはステューヴンスが賛美するイングランドの神話的風景像にメスを入れ、その深層(=真相)と欺瞞を暴き出している。両作の風景の役割を踏まえると、『ガウェイン卿の緑の騎士』の風景が『忘れられた巨人』に与えた影響は表面的なものではなく、実に大きな意味をもっていたことがわかる。中世の地方詩人が描いた「ガウェイン・カントリー」はイシグロ文学の主題を継承し発展させるたしかな創造的下地となったのである²⁹⁾。

注

- 1) 翻訳や翻案の分析を含む『ガウェイン卿の緑の騎士』の受容については Nastali を参照。
- 2) たとえば、Tolkien & Gordon (1925 年初版), xvi。
- 3) 1897 年に創刊された雑誌『カントリー・ライフ』は英国における田園の文化的重要性を説き、カントリー・ハウスの保存を訴えてきた。本雑誌の創刊は産業革命を端緒とする反田園の社会が迫っていたことを示唆する。中島 245-49 参照。
- 4) 『ガウェイン卿と緑の騎士』は従来の修辭的風景が孕む矛盾を自覚していたのではないか、という指摘もある。例えば、同時代に書かれた Alliterative Morte Arthur (頭韻詩『アーサーの死』)では、巨人との血腥い戦の前に陽気な春の訪れが描き込まれているが、これは前後の文脈に沿わない。『ガウェイン卿と緑の騎士』では騎

- 士の過酷な試練が冬の情景によって際立ち、人物と風景が相関している (Elliott 39)。
- 5) 関連事項は特にエリオットの “Landscape and Geography” に分かりやすく説明されている。また緑の礼拝堂の特定を巡っては諸説ある。これらに関しては Vantuono 228-29 を参照。
 - 6) 毎年英国リーズで開催されている国際中世学会 (International Medieval Conference) では、“Gawain Country” として作品ゆかりの地をたどるエクスカッションが行われるほどである。
 - 7) 特に「ガウェイン・カントリー」という観点から影響を受けた現代の作家として、英国の小説家 Alan Garner が挙げられる。チェシャー州生まれで、代表的に *The Weirdstone of Brisingamen* (『ブリジガメンの魔法の宝石』1960) や *The Moon of Gomerath* (『ゴムラスの月』1963) がある。エリオットの *The Gawain Country* にはガーナーへの献辞が添えられている。
 - 8) 以下、*Sir Gawain and the Green Knight* からの引用は全て Tolkien & Gordon 版 (Davis 改訂版)。
 - 9) 頭韻詩『アーサーの死』に登場するモン・サン・ミシェル島の巨人は “crag” を棲み処とし、アーサー王一行がそこへ赴く際5度に渡って言及されている (l. 851, l. 858, l. 876, l. 882, l. 941)。また頭韻詩『アーサーの死』の風景に関しては、Finlayson 参照。
 - 10) *MED* はこの語義を “a crag, twisted rock” としている。*MED* は初例として13世紀の問答詩 *The Owl and The Nightingale* を挙げ、その後本作の3例を取り上げるのみである。地名としては Cnarreford, Cnaresdale, Gnaresdale, Knar, Knaresdale, Knarford を挙げている。“knarre,” s. v. n. l. (b)。
 - 11) 日本語訳は菊池訳に依拠するが、必要に応じて適宜変更している場合がある。
 - 12) またエリオットは本描写について “an unexpected landmark which provides not only a memorable line of alliterative sonority but a topographical detail which does indeed look very much like something the poet was not making up out of his head” (“Landscape and Geography” 113) と考察する。
 - 13) *MED* は *SGGK* からの例を挙げていないが、次の 3(a) の語義が該当するだろう。“Of ground: without fresh vegetation, barren; also, not covered (as with a carpet or blanket); of autumn: devoid of green vegetation, sere; of trees: not covered with leaves, leafless; ~ of leaves, stripped of leaves.” *OED* ではどうしてか初例が1601年となっている。また 3(a) の意味を踏まえた場合、「緑の」騎士の表象との対比が興味深い。
 - 14) Godden は “be naked lyppez” (730) を「奥方の唇」としているが、これは「モルガンの唇」の誤りであろう。
 - 15) 王都に帰還したガウェインは忸怩たる思いながら決死の覚悟の下、自身の過ちを公表するが、傷跡を衆目に曝け出す様は、“Be nirt in be nek he naked hem schewed” (l. 2498) と記される。*OED* は “nirt” の語源に関して、“Probably a borrowing from early Scandinavian” としている。詳細は語源欄を参照。
 - 16) 以下、*The Buried Giant* からの引用は全て Kazuo Ishiguro, *The Buried Giant* (Faber and Faber, 2016) による。日本語訳は土屋訳に依拠するが、必要に応じて適宜変更している場合がある。
 - 17) インタビューは Rukeyser の記事に依拠する。また、イシグロがイースト・アングリア大学創作科入学前に執筆した *Waiting for J* (『J を待ちながら』1981) には『ガウェイン卿と緑の騎士』の影響が見られる。この点は森川 214 を参照。
 - 18) イシグロは悪鬼の「荒々しい息遣い」を “panting breaths” と記しているが、実際に Tolkien & Gordon の校訂本の註釈では中英語の動詞 “anelede” (l. 723) を取り上げ、この語が含む “panting” のニュアンスを議論している。98 頁参照。
 - 19) マーリンの “enchantment” に起因する霧の覆う大地を「脱魔法化した風景」と呼ぶのはやや奇妙ではある。
 - 20) イシグロにとっての「記憶」とは、単なる物覚えや物忘れの類ではなく、感情や欲望といった一時のファクターで忽ち霞み、歪曲し、忘却を引き起こす心の作用である。それは人が語るための「フィルター」であり、特に初期の長編三作——*A Pale View of Hills* (『遠い山なみの光』)、*An Artist of the Floating World* (『浮世の画家』)、*The Remains of the Day* (『日の名残り』)——では、過去を回顧する登場人物にとって不可欠でありながら一方で何とも心許ない「ツール」となっている (Teo 7-9)。イシグロ文学における継承という点で、池園は主に『私を離さないで』と共通する主題とその発展を考察し、「それまでの作品に見られる、過去の歴史は覆せないという静的な世界観から、葬られた過去を掘り起こすことにより歴史は変えられうるという動的な世界観への転換が、*BG* (『忘れられた巨人』) におけるイシグロの斬新な試みである」(50-51) と指摘する。「静的」から「動的」な世界観への変化は、本稿で述べる風景描写とも関連してくると思われる。
 - 21) 以下、*The Remains of the Day* からの引用は全て Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* (Faber and Faber, 1989) による。日本語訳は土屋訳に依拠するが、必要に応じて適宜変更している場合がある。
 - 22) ここで付される “obvious” 「明らかな」という形容詞は、「表面上、露骨には」顕在化しないものの、その国土に「たしかに」潜む種々の「ドラマ」を暗に示しているともとれるだろう。イングランドの風景は完全なるドラマ性に欠けているのではなく、それが「あからさま」ではないだけである。また、美しさ・偉大さを「叫ばない」のではなく、「叫ぶ必要がない」のであって、ともに潜在的な可能性は否定されていない。反対に、ス

ティーヴンスはアフリカやアメリカで見られる大瀑布などの壮観については、“more obviously spectacular scenery” (28)、また “unseemly demonstrativeness” (29) と表現し、「これ見よがし」の景観に否定的である。よって、「明白さ、露骨さ」は執事のあり方としては不適當で、忌避すべきものとなる。例えば、ステイーヴンスの父はかつて車中で狼藉を働いた紳士らを制し穏便に対処したが、ここでも彼が “obvious anger” (40) 「あからさまな怒り」を見せずに解決したことが称賛されている。一方で、物語の終盤、夕暮れの棧橋で元同業者の男から慰めを受けるステイーヴンスは、“I’m so sorry, this is so unseemly” (256) と言って自分の啜り泣く様子を “unseemly” と詫びている。風景の中に抑圧されていた「劇的要素」が最終的に制御不可能な感情となって沸き起こる。

- 23) 風景とイングリッシュネスの関連性については、Kim 217-34 参照。また Trimm は、追憶の旅の道中執事の威厳を支えるのが田舎の景色に体现されるイングリッシュネスの精神であり、“Landscape becomes a site of memory, one that is seen to embody national identity—the countryside is the very face of the nation itself, for it is here that the expressions of England are displayed” (192) と論じている。
- 24) この点は、Vorda と Herzinger によるインタビューの中でイシグロ自身も指摘している。76 参照。ケントンとの関係性において一つの転機となった食器室での一幕では、ステイーヴンスが読んでいる本を知りたいがため歩み寄るケントンに対して、本を引き出しに入れ鍵を閉めようとする。これを “absurdly dramatic” (175) として退ける。
- 25) ラッシュディの評論は *The Guardian Online* (17 Aug. 2012) よる。これはその後 *The Remains of the Day* の Everyman’s Library Classics 版の序文としても収録されている。
- 26) ステイーヴンスは出発の当初から未開の地への不安を抱いている。
- 27) ガウェインは登場の際、愛馬に言及しながら “Poor Horace missed his breakfast this morning, for we were on rocky ground when we awoke” (119) と言うが、これは「剥き出しの岩々」を枕とした『ガウェイン卿と緑の騎士』の騎士の姿を喚起する。また中世ロマンスにおけるガウェイン像に関しては岡本参照。
- 28) ステイーヴンスは執事の衣服を “professional armoury” (138) と呼び、自身の食器室を “a general’s headquarters during a battle” (173) 「戦中の司令本部」と捉えている。
- 29) イシグロは作品の舞台設定を巡って、このようなブリテン島の表層下にある暴力的起源の断片を『ガウェイン卿と緑の騎士』の中に観察した、とも言えるかもしれない。それは作家の単なる直感に基づく選択ではなく、より深層的主題が起こした共振ゆえではないか。この点で、本詩を縁取るトロイ人によるブリテン建国・植民の様子は注目に値しよう。そもそも中世アーサー王物語は戦争と平和を巡る問題と深く関連し受容されてきた。20 世紀最大の翻案の一つである T. H. ホワイトの *Once and Future King* (『永遠の王——アーサーの書 (下)』1958) には『忘れられた巨人』に通ずる主題や風景描写が見られる。たとえば、アーサー王は「イングランドの野には、もうじきキンポウゲやデージーの花が咲くだろう。平和になるのはすてきなことだ」(537) と述べ、王国の行く末については「人びとが過去を忘れることを拒むかぎりには、すべてが悲しみにいたるのだろう。ユーザーやカインがなした不正は、それを忘れるという祝福される行為によってのみ、正すことができたであろうに……忘却という祝福こそは、なにより必要なことなのだ」(560-61) と述べている。アーサー王物語の翻案を巡っては、こうした現代の翻案作品の系譜や中世主義の影響を考慮する必要があるだろう。

Works Cited

- Benson, Larry D., editor. *King Arthur’s Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte Arthure*. U of Exeter P, 1986.
- Elliott, Ralph W. V. *The Gawain Country: Essays on the Topography of Middle English Alliterative Poetry*. U of Leeds, School of English, 1984.
- . “Landscape and Language in Middle English Alliterative Poetry.” *Poetica*, vol. 29, 30, 1989, pp. 1-16.
- . “Landscape and Geography.” *A Companion to the Gawain-poet*, edited by Derek Brewer and Jonathan Gibson, D. S. Brewer, 1997, pp. 105-17.
- Finlayson, John. “Rhetorical *Descriptio* of Place in the Alliterative *Morte Arthure*.” *Modern Philology*, vol. 61, no. 1, 1963, pp. 1-11.
- . “The Expectations of Romance in *Sir Gawain and the Green Knight*.” *Genre*, vol. 12, no. 1, 1979, pp. 1-24.
- Godden, Richard. “Neighboring Wastelands in *SGGK*.” *Parasynchronies*.
<https://rickgodden.com/2015/05/26/neighboring-wastelands/>.
- Grossman, Lev. “Review: *The Buried Giant* Is an Arthurian Epic.” *Time*, 26 Feb. 2015, time.com/3723602/the-return-of-the-king/. Accessed 31 Aug. 2017.

- Ishiguro, Kazuo. *The Buried Giant*. Faber and Faber, 2016.
- . *The Remains of the Day*. Faber and Faber, 1999.
- Kim, Youngjoo. "Revisiting the Great Good Place: The Country House, Landscape and Englishness in Twentieth-century British Fiction." Diss. Texas A&M U, 2002.
- Lindley, Arthur. "'Ther he watz dispoyled, with spechez of myerthe': Carnival and the Undoing of Sir Gawain." *Exemplaria*, vol. 6, no. 1, 1994, pp. 67-86.
- Maynadier, Howard. *The Arthur of the English Poets*. Houghton Mifflin, 1907.
- Nastali, Daniel. "Jessie Weston and the Green Knight." *Arthuriana*, vol. 23, no. 3, 2013, pp. 44-54.
- Pearsall, Derek. "Rhetorical Description in *Sir Gawain and the Green Knight*." *Modern Language Review*, vol. 50, no. 2, 1955, pp. 129-34.
- Rukeyser, Rebecca. "Kazuo Ishiguro: Mythic Retreat." *Guernica*, 1 May 2015.
- Rushdie, Salman. "Rereading *The Remains of the Day* by Kazuo Ishiguro." *The Guardian Online*, 17 Aug. 2012, www.theguardian.com/books/2012/aug/17/rereading-remains-day-salman-rushdie. Accessed 31 Dec. 2017.
- Swift, Graham. "Shorts: Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008, pp. 35-41.
- Teo, Yugin. *Kazuo Ishiguro and Memory*. Palgrave Macmillan, 2014.
- Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, editors. *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd ed., rev. Norman Davis. Clarendon P, 1967.
- Trimm, Ryan. "Telling positions: Country, Countryside, and Narration in *The Remains of the Day*." *Papers on Language and Literature*, vol. 45, no. 2, 2009, pp. 180-211.
- Vantuono, William, editor and translator. *Sir Gawain and the Green Knight*. Notre Dame University P, 1999.
- Vorda, Allan, and Kim Herzinger. "An Interview with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008, pp. 66-88.
- アウエルバッハ, エーリッヒ. 『ミメーシス——ヨーロッパ文学における現実描写 (上)』 篠田一士・川村二郎訳, ちくま学芸文庫, 1994.
- イシグロ, カズオ. 『日の名残り』 土屋政雄訳, ハヤカワ epi 文庫, 2001.
- . 『忘れられた巨人』 土屋政雄訳, ハヤカワ epi 文庫, 2017.
- 安藤聡. 「カズオ・イシグロ『日の名残り』——神話的イングランドの崩壊——」『愛知大学文学論叢』135号, 2007, 165-185頁.
- 池上俊一. 『動物裁判: 西欧中世・正義のコスモス』 講談社, 1990.
- 池上忠弘. 「*Sir Gawain and The Green Knight* における自然」『日本文学研究』(日本英文学会編)40巻, 1号, 1964, 1-15頁.
- 池園宏. 「*The Buried Giant* におけるイシグロ文学の継承と発展」『英語英文学研究』(広島大学英文学会)62巻, 2018, 45-58頁.
- 岡本広毅. 「カズオ・イシグロのアーサー王物語——ノーベル賞作家はガウェイン推し」『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか』岡本広毅・小宮真樹子編, みずき書林, 259-78頁.
- 菊池清明. 「中世英文学における自然描写の変容——『カンタベリー物語』と『ガウェイン卿と緑の騎士』」『中世英語英文学研究の多様性とその展望——吉野利弘先生・山内一芳先生喜寿記念論文集』菊池清明・岡本広毅編, 春風社, 2019, 272-90.
- 中島俊郎. 『英国流旅の作法——グランド・ツアーから庭園文化まで』 講談社学術文庫, 2020.
- ホワイト, T. H. 『永遠の王——アーサーの書 (上・下)』 森下弓子訳, 創元推理文庫, 1992.
- 森川慎也. 「カズオ・イシグロ作品解題」『ユリイカ: 詩と批評』(特集カズオ・イシグロの世界)49巻, 21号, 2017, 214-23頁.

(本学文学部准教授)

Reception and Expansion of “The Gawain Country”
Literary Inspiration for Kazuo Ishiguro’s *The Buried Giant*

by
Hiroki Okamoto

Memory and landscape are important concepts that are interwoven in Kazuo Ishiguro’s novels. While his most recent novel, *The Buried Giant* (hereafter *BG*), follows this theme, the story is set in a slightly bizarre medieval Britain, where the inhabitants live peacefully while constantly losing their memory. This is apparently the effect of a magical breath, which, created by Merlin (through King Arthur), is intended to make people forget as well as erase the past atrocities the Britons caused the Saxons. Despite its fantastical atmosphere, the land is strongly characterised by traces of a historical procession on “disenchanted” scenery.

The fact that *BG* has an interesting landscape is not irrelevant to one of his distinctive literary sources. Ishiguro states that his imagination was especially sparked by “that tiny little description of the country he (Gawain) was crossing,” a scene in the fourteenth-century Arthurian poem *Sir Gawain and the Green Knight* (hereafter *SGGK*). This paper explores an aspect of Ishiguro’s memory and landscape by drawing attention to Ishiguro’s reading of *SGGK*. While *SGGK* is categorised in the genre of romance, it is a poem with a combined focus on fantasy and history, which overlaps the nature and setting of *BG*. Covered by the “naked” rocky hill, the elaborate and “disenchanted” description of *SGGK*’s local landscape, or so-called “the Gawain Country,” is markedly different from that of other romance narratives, invoking Gawain’s mental condition and foreshadows the narrative that ensues. Serving as the central source of Ishiguro’s inspiration, Gawain’s quest for the Green Chapel provides a potentially creative ground for the writer to pursue the theme of memory and landscape.